

アスペクトと反復副詞

—スロヴェニア語の動詞の体についての再検討—

三谷 恵子

1. はじめに

全ての動詞が完了体、不完了体のどちらかの^{ない}体の文法範疇を担うスラヴ諸語では、当然、話し手は動詞を用いる限りかならず体の選択を迫られることになる。ある外界の事象を表すために、完了体動詞を用いるか、不完了体動詞を用いるか、選択肢はこの二者しかない。いくつかの動詞は完了体、不完了体双方の機能をもつが、実際に使用される場合にはどちらかの体の意味で用いられるわけだから、実質やはり選択が行われることになる。どのスラヴ語でも、どちらの体が使用されるかが文法的にほぼ定まってしまうような文脈と、体の選択が話者に委ねられる可能性を残す場合がある。前者のケースには例えば、発話時と同時に進行中の事象を述べる不完了体現在形が挙げられるだろう。「今、彼は何かしているところです」という文脈で、「彼」の動作を表すのに不完了体現在形が使用されることは大部分の場合、文法的に正しい文を発するために必須の条件であり、ここに完了体現在形を用いる事は出来ない。スロヴェニア語では“完了体現在形が発話時の事象について言及できる”という指摘が伝統的にある [Škrabec 1903] : *Otroci, najprej vam povem(pf), da jutri ne bo šole.* 「(教師が生徒達に) 皆さん、まず言っておきます【完】が、明日は学校はありません」。しかしこれは話し手が自らの実行する行為について語る状況に限って使用される完了体現在形で、他のスラヴ語においてもある程度見られる現象である [Galton 1976 : 92-93]。スロヴェニア語の場合、この状況での完了体現在形の使用が他のスラヴ語に比べ、顕在化しやすいということにすぎない。

話者による体の選択という観点からすると、反復は興味深い状況である。スラヴ語では、反復の意味はまず不完了体と結びつき、通常の時制文で反復を明示する要素が他にない場合、単独に用いて反復の事実を表すことができるのは不完了体であって、完了体にはこの機能はない。スロヴェニア語にももちろん、このことはあてはまる：

- (1) *Prihajale(ipf) so in so umirale(ipf) in druge so prihajale*
 arrivedF.PL AUX and diedF.PL others

namesto njih.

(Cankar, Hiša Marije Pomočnice)

in place of them^{GEN}

(少女たちが)やって来て【不完】は、死に【不完】、また別の子
たちが代わりにやって来た【不完】。

ところが反復を明示する要素と共起すると、完了体の使用が可能になる場合がある。本論の筆者は[三谷 1998]で、スロヴェニアの作家 Ivan Cankar(1876-1918)の中編小説『救済のマリアの家 Hiša Marije Pomočnice』(1998 では『救護者マリアの家』)(作品発表は 1904 年)にこの現象が顕著に見られる事を考察の契機に、反復と動詞の体の関係を考察した。そこで述べた事柄は基本的に誤っていないと考えるが、動詞の体についてはさらに検討すべき点が多く残されていた。そこで小論では、再度同じ出発点、すなわちこの作品にしばしば用いられる頻度副詞 *časih*「時折」(現代語では *včasih*) が体とどう関わるかという問いから出発し、反復を表す副詞句と体の関係を統語構造におけるアスペクト素性の現れ方という観点から再検討して、スラヴ語の動詞の体の研究に寄与する一考察としたい。

2. 頻度副詞と体

2.1. 体と反復について

完了体は事象を一つの‘完結’したものとして提示する。この場合の‘完結’とは「事象の内在的性格あるいは外的な作用によって到達される《内的限界》[Bondarko 1990; 1991; Bondarko (ed.) 1987]」、つまり第一には、事象が生起しその結果何らかの状態変化に至るような、Vendler に従えば‘完成 accomplishment’や‘達成 achievement’などが‘頂点 climax’[Vendler 1967: 100]として持つような、事象の性質に由来する終結性であり、第二には、それ自体は本質的に終結性を持たない‘活動 activity’事象であっても一定の時間が経過して終了したことが明確に認知された場合に得られる終結性(‘ある時間立ち通す’のような)である。SS および ESJ の「持続性において限られた事象」[SS: 285, ESJ: 30]という、文字どおりにはやや分かりにくい定義も、この第二の完結性の意味を含んだ完了体の‘終結性’に着目した述べ方であろうと思われる。一方 Orešnik はむしろ、完了体のいわゆる‘全一性’を重要視して「完了体の基本的意味は事象の初めから終わりまでを包含し、一つの全体として表すことにある」[Orešnik 1994: 88]と述べている。終結性、全一性のどちらの特徴を前面に出して定義するにしても、完了体は事象をその進行過程において捉えることがないとい

うことを把握しておくことが必要である。完了体と相容れないこの特徴は不完了体によって表され、持続または反復の意味は不完了体が担うアスペクト特徴となる。

しかし、一般的に言って、ある場面で使用されている不完了体動詞が反復を意図しているかどうかの判断は、多くの場合文脈に依存することになる。反復の意味の不完了体に関してスラヴ語では、多回動詞という下位グループが設けられる場合がある。チェコ語では例えば、反復を一義的に示す多回動詞が *-(a)va-* という接尾辞を用いて不完了体動詞から派生され、*sedet* 【完】「座る」→ *sedat* 【不完】→ *sedávat*、あるいは *chodít* 【不完】「通う」→ *chodíval* 「通ったものだ」から *chodívával* 「よく通ったものだ」のように重複して形成される。これらの動詞は多くの場合過去形で使用され(現在形での使用には語彙的制約がある)、過去に習慣的に反復された事象を述べるのに用いられる：*pred spaním chodíval na procházku* 寝る前に散歩に行ったものだ [MČ.2. 184]。しかしスロヴェニア語では、多回の意味の不完了体を派生させる形態素は発達していない。ESJ は『反復動詞 *ponavljani glagol*』を項目に挙げ、*skočiti* (pf) 「跳ねる」に対する *skakati* (ipf) 「(何度も) 跳ねる」や *nesti* (ipf/pf, def) 「(一方向に) 運ぶ」に対する *nositi* (ipf, indef) 「(不定方向に、何度も) 運ぶ」¹ を例示している [ESJ : 194]。しかし *nositi* の場合は、不定動詞に固有の、方向を特定しない移動の意味から生じる多回性であるし、*skakati* のタイプは、不完了体が基本的意味として表す持続性に、Vendler のいう Achievement 型の瞬間事象(以下‘生起事象’とする)が埋め込まれた結果生じる‘多回’性で、日本語でも持続性を表す {-te-i-} 形態素を、生起事象を表す動詞の語幹に付加させると「跳ねる」→「跳ねている」のように反復の意味が生じるのと同じ現象である。実質的にはつまり、接尾辞付加によって派生される不完了体動詞が、事象の性格に依存して反復の意味を含意することになる。その範囲でとらえれば、スロヴェニア語の‘多回’あるいは‘反復’動詞の派生には次のような接尾辞付加が挙げられる：

-ava- によるタイプ：

poropotati (pf) 「踏みならす」→ *poropotavati* (ipf)

izmetati (pf) 「投げ出す」→ *izmetavati* (ipf)

-ova / -eva によるタイプ：

zamazati (pf) 「汚す」→ *zamazovati* (ipf)

¹def は「定動詞」、すなわち特定方向への一回の移動を表す動詞、indef は「不定動詞」、すなわち方向を特定しない移動を表す。ロシア語の場合これらの非派生(無接辞)の移動動詞は定動詞、不定動詞ともに不完了体だがスロヴェニア語では定動詞は完了体、不完了体両方の機能を持つとされる。

srečati (pf) 「出会う」→ srečevati(ipf)

なお、これらの動詞によって表されるのは、チェコ語の場合の‘多回’のような習慣的反復ではなく、あくまでも単なる事象の繰り返しの意味の‘反復’である：

- (2) Kljun je bil zelo širok, oči se ni videlo.
 beakNOM AUX was very wide eyes NOM.PL REFL NEG saw N.SG
Poskakoval(ipf) je, kakor da bi hotel pasti na glavo. (Hiša Marije)
 hopped AUX as if would like to fall head down
 嘴はたいそう幅広く、目はどこにあるかわからなかった。飛び跳ねる【不完】
 のだがそれはまるで逆飛び込みをしようとでもするかのようなだった。

完了体が基本的に時間長を持たない生起事象を表すのに対し、不完了体が反復ではなくプロセスを表すという場合もある。次の(3)では izgubiti se 【完】「消える(再帰形)」に対応する不完了体 izgubljeni se が zmerom dalje 「ますます遠く」という副詞句によって示される進行的変化を表す：

- (3) Tako daleč je bil že dom in izgubljal(ipf) se je
 so far AUX was PTCL home and disappeared REFL AUX
 zmerom dalje v daljavo.
 more and more far in distance ACC
 すでに家はかくも遠く、そしてますます彼方へと遠く 消え
ていく【不完】のだった。

このように、不完了体には反復を表す機能があるといっても、多くの場合、とりわけ活動事象を表すことのできる動詞の場合には、反復の意味は補助的な手段がなければ明示されないことになる。したがって当然、反復を明示するためには「いつも」「時々」のような頻度を表す副詞（以下‘頻度副詞’）や、反復回数を表す副詞（‘回数副詞’）あるいは周期性を表す時間表現（「日曜日には」「梅雨の時期には」など）が添えられることになる。次節以下では頻度副詞と体の関係について記述する。

2.2. časih / včasih の場合

本論に先行する論文〔三谷 1998〕のきっかけとなったのは、Cankar の『救済のマリアの家』を通読するとしばしば出会う、časih「時折」という頻度副詞だった（現代語では včasih となる。Cankar はこの作品のみならず他の作品でも časih を使用して

いるが、例えば Gustav Šilih の 1938 年の作品『Beli dvor 白い館』では *včasih* のみ
が使用されている)。改めて Mac 用のテキスト分析ソフト TextUtil で調べたところ、
作品の総語数が 33018、*časih* の使用は 39 回であった。さらに、これらが共起する動
詞の形式を調べたところ、以下の結果を得た（数値は用例数）：

過去時制 38 その他 1（完了体現在形）

完了体過去形：31

不完了体過去形：5

両体過去形：2

完了体、不完了体双方の機能を持つと SSKJ に記載されている動詞は、どちらの意
味で使用されているかを問題とせずに‘両体’とした。ここでは *slisati* 「聞く（耳に
する、聞こえるの意）」が該当し、二回使用されている。この数値が示すように、完了
体過去形の共起が圧倒的に多い。以下はその二例である：

- (4) *Zletel*(pf) je *časih* na polico pred oknom, sprehajal(ipf)
fled away Adv on shelf ACC in front of window INSTR walked
se je od kota do kota ter potrkaval(ipf) na steklo.
REFL AUX from corner to corner GEN and knocked on glass ACC
時折 窓の前の棚へと 飛んで行き【完】、端から端へと
行き来して【不完】はガラスをコツコツ叩く【不完】のだった。

- (5) *Prišel*(pf) je *časih* oče pijan domov in
arrived AUX Adv father NOM drunk home and
je objemal (ipf) mater.
AUX embraced mother ACC
時折 父は酔って 帰宅し【完】、母を抱き締める【不完】のだった。

このような *časih* と完了体過去形との共起の優位は、体の機能という点からすると
一見、予想外のように見える。2.1. で言及したように、完了体／不完了体の体のカテゴ
リーを持つスロヴェニア語で、事象の反復を動詞の形態として示すことができるのは不
完了体である [SS : 289; Vencenot 1975 : 223-225]。ある状況下で繰り返される事象
を表す場合、この機能は明確に示される：

- (6) *Izpraševale*(ipf) so Malči, toda ni odgovarjala(ipf) veliko.
asked F.PL AUX but NEG answered F.SG much

皆はマルチに あれこれ尋ねた 【不完】が、彼女はわずかしか 答えなかった 【不完】。

izpraševati「尋ねる」は〈質問〉の反復（複数の動作主による不特定複数回の反復）を、odgovarjati「答える」は〈返事〉のくり返しを、ここでは表している。この状況は、odgovarjati に対応する完了体 odgovoriti を含む次の (7) と対比できる。こちらでは一度の質問とそれに対する一度の返答が描かれている：

- (7) Kako vam je, otroci? je vprašal(pf) njen tanki, nosljavi glas (...)
 how you DAT children AUX asked her thin nasal voice
 Lojzka se je poklonila(pf) in je odgovorila(pf).
 REFL AUX bowed answered
 「ご機嫌はいかが、子供たち？」彼女の細い鼻声が尋ねた 【完】
 (….) ロイズカはお辞儀をし 【完】 答えた 【完】。

反復を明示する不完了体の機能という事実から単純に、「反復事象は不完了体で表される」と仮定すれば、*časih* が用いられる文脈もまた明らかに反復事象を表しているわけだから、不完了体動詞の使用が予期されることになる。スロヴェニア語と同じように反復事象が基本的に不完了体で表されるロシア語の場合でも、*časih* に対応する非終結性反復を表す副詞 *izredka*, *inogda*, *vremja ot vremeni*（どれも「時折」）が過去における反復を表す文脈で用いられる場合、共起するのは不完了体動詞過去形であって、完了体過去形ではない：

- (8) Ded Saška *vremja ot vremeni* napivalsja(ipf) i šol(ipf) pod okna
 old Sashka from time to time get drunk came under window
 vyprašivat' u pana dvugrivennye.
 to wheedle at master GEN 20-kopecks ACC.PL
 (Sjoloxov, Tixij Don [Forsyth : 155])
 時に 老サーシカは 酔って 【不完】 御主人から幾ばくかの 20 カペイカ
 貨をせしめるために窓辺に寄って行った。

- (9) Vasilij *izredka* brosal(ipf) vzgljady v storonu.
 occasionally cast glances ACC.PL to side ACC
 (Tendrjakov, Uxaby [Forsyth ibid.])
 ワシーリィは 時折 脇に視線を 投げた 【不完】。

ロシア語では、例えば (9) の *brosal* の代わりに完了体を用いて **izredka brosil(pf)* ということはない。しかし『マリアの家』では *časih* と共起する動詞の大部分が完了体過去形である。このことを考える前にまず、この現象が『マリアの家』に固有のものか、あるいはより一般的な体の特徴に結び付けられるものかを確認する必要がある。そこで Cankar の他の作品、また Cankar と同時代の作家の作品、そして現代の作品から *časih* / *včasih* を含む文脈を調べてみた。〈表 1〉がその結果である。ここで「総語数」とあるのは筆者の資料体の総語数で、基本的にそれぞれ作品全体の語数に対応するが、Cankar の *Mimo življenja* は作品の 9 割程である。また「共起する形式」の中の「その他」は、名詞句を限定する用法など、動詞の体の分析に直接関わらないと筆者が判断したものである²：

〈表 1〉 *časih* / *včasih* と動詞の共起関係

作品 (発表年度)	総語数	<i>časih</i> / <i>včasih</i>	共起する形式
I. Cankar			
<i>Mimo življenja</i> (1920)	57476	46	<u>完了体過去形 28</u> ; 不完了体過去形 6 完了体現在形 7 ; 不完了体現在形 3 完了体条件法 1 ; その他 1
<i>Hlapec Jernej</i> <i>in njegova pravica</i> (1907)	20338	2	<u>完了体過去形 1</u> ; 完了体現在形 1
<i>Potephu Marko</i> <i>in Kralj Matijaz</i> (1905)	29558	4	<u>完了体過去形 2</u> その他 2
Cankar と同時代の作家の作品			
I. Tavčar <i>Janez Sonce</i> (1885)	44932	12 (<i>časih</i>)	<u>完了体過去形 2</u> ; 不完了体過去形 3 完了体現在形 2 ; 不完了体現在形 4 その他 1
F. S. Finžgar <i>Sama</i>	65607	10	<u>完了体過去形 2</u> ; 不完了体過去形 3

² これらの資料体は Zbirka slovenskih leposlovnih besedil(<http://www.ijs.si/lit/leposl.html>) より入手したものである。

(1912)		(<i>včasih</i>)	両体過去形 (<i>čutiti</i>) 1 ; 完了体現在形 1 ; 不完了体現在形 3
G. Šilih	144129	40	完了体過去形 17 ; 不完了体過去形 9
<i>Beli dvor</i>		(<i>včasih</i>)	完了体現在形 3 ; 不完了体現在形 8
(1938)			完了体命令形 1 ; その他 2
現代の作品			
I. Sivec	55493	12	完了体過去形 3 ; 不完了体過去形 3
<i>Kruh ponoč spi</i>		(<i>včasih</i>)	完了体現在形 2 ; 不完了体現在形 2
(1994)			その他 2

včasih / *časih* の出現度は作品によって差があり、同じ Cankar の作品でも『Hlapec Jernej in njegova pravica 下僕イエルネイとその権利』では2度しか用いられていない。『マリアの家』は総語数に占める *časih* の使用度が比較的高く、しかも完了体過去形との共起が極端に多いという点で若干特異といえるかもしれないが、Cankar の他の作品、また、*včasih* の用例が40例認められる Šilih の『Beli Dvor (白い館)』でも、完了体過去形の共起は他の時制形に比べ優位にある。19世紀の Tavčar、現代の Sivec、どちらも用例数はさほど多くないが完了体過去形の共起はその他の時制形の共起とほぼ拮抗している。

以上の限られた資料からの調査ではあるが、ここから、スロヴェニア語ではロシア語とは違い、過去における反復状況を表す場合、完了体過去形と *časih* / *včasih* という頻度副詞が共起できるという判断を得たとする。

2.3. *pogosto* の場合

časih と同じように非終結性の反復を表す他の副詞の場合にも、同様のことはいえるだろうか。例えば『マリアの家』には次の (10) (11) 例のような反復表現がある。(10) では *ob praznikih* 「祭日ごとに」、(11) では *pogostokrat* 「たびたび」という副詞句が反復を明示しているが、これらの場合共起しているのは不完了体である：

- (10) *Dobivala*(ipf) je *ob praznikih* slaščic, kolačev, pomaranč
 gained F.SG AUX on holidays candy GEN.PL cakes GEN.PL orange GEN.PL
 (...) *razdelila*(pf) je vse med tovarišice, sama ni okusila(pf) ničesar.
 distributed all among friendsACC.PL/self NEG tasted none GEN

祭日の度に 彼女はキャンディーやケーキ、オレンジを

もらった【不完】(…) みな仲間に分け【完】自分は何も口にしなかった【完】。

- (11) Ko je prišel(pf) prvikrat, je ugledal Tončko; (...) nato
 when AUX came first time saw Tončka ACC later
 je prihajal(ipf) *pogostokrat*, tudi če očeta ni bilo doma.
 AUX visited Adv also if father GEN NEG was home
 初めて来た時、トーンチカに目を留めた(…)。それから
 父が家を留守にしている時でも しばしばやって来た【不完】。

(11) 例で用いられている *pogostokrat* は *časih* / *včasih* より頻度の高い非終結的反復を表す頻度副詞 *pogosto* 「しばしば」と同義である。そこで副詞 *pogosto* の場合について、動詞の共起関係を調べた。『マリアの家』では *pogosto* および (11) 例の *pogostokrat*、またこれらと同義の *pogostoma* が各々 1 例あり、すべて不完了体過去形との共起である。＜表 1＞の Cankar の他の三つの作品では *pogostokrat* が『Mimo življenja 人生の傍らに』に 2 例（不完了体過去形 1、完了体現在形 1）であった。用例は少ないが、『マリアの家』で完了体過去形の共起が圧倒的であった *časih* の場合と対比させると対照的とも見える。*pogosto* の場合も (11) と同じく、共起する不完了体は「やって来る」の意味の *prihajati*(ipf) である：

- (12) Zmerom bolj *pogosto* je prihajala(ipf) k njim, pisala(ipf) ji
 more and more Adv AUX visited F.SG to them DAT wrote her DAT
 tudi pisma.
 also letters ACC.PL
 ますます 頻繁に かれらを 訪れ【不完】、また彼女に手紙も書くのだった。

časih では、先出の (5) や次の (13) が示すように、この動詞に対応する完了体の *priiti* が使用されている：

- (13) Prišla(pf) je *časih* v očetovo sobo in je sedla na mehek stol...
 came Adv in father's room ACC and seated on soft table ACC
 (彼女は) 時折 父の部屋に やって来て【完】柔らかなテーブルの上に腰掛けた…

Šilih の『白い館』の場合を見ると *pogosto* の用例は 32 あり、その内訳は

完了体過去形 7; 不完了体過去形 13
 両体過去形 (videli) 2; 不完了体現在形 7
 その他 3

である。また Finžgar の『Sama 彼女一人』(1912) では *pogosto* の数は 2 例で、どちらも不完了体過去形が共起している。(14) は Šilih の完了体過去形の例、(15) は Finžgar の不完了体過去形の例である：

(14) Zdaj ga je *pogosto* ustavil(pf) in ga s prijateljsko
 now him ACC AUX Adv stopped and him ACC with friendly
 vsiljivostjo povlekel(pf) s seboj v gostilno.
 intrusion INSTR dragged with self INSTR into tavern ACC
 今や彼を ちょくちょく引き止めて【完】は、親し気な強引さで酒場に
 引っ張り込む【完】のだった。

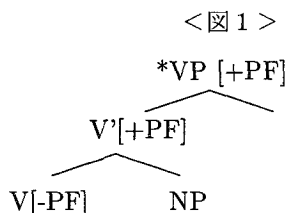
(15) Vino je *točil*(ipf) pomalem v kozarec in *izpival*(ipf)
 wine ACC AUX poured little by little into glass ACC drunk
pogosto ter posreboval(ipf) kaplje z dna.
 Adv and sipped drops from bottom GEN
 頻繁に、ワインをちびちびグラスに 注いでは【不完】
飲みほし【不完】そして底に残った滴をすすりあげた。

pogosto の場合には、*časih* / *včasih* に比べ不完了体との共起が若干優位をしめるように見受けられる。しかし完了体との共起も排除されてはいない。結局、スロヴェニア語では非終結反復を表す頻度副詞は、過去における反復を表す状況で完了体、不完了体双方の体と共起し、どちらの体が使用されるかは文法的に決定されるわけではなく、別な理由によって決定されると判断される。次の 3 節ではこれらの頻度副詞と体との共起関係を統語構造の階層性という観点から解釈し、同時に体の選択に何がかかわるのかを考察する。

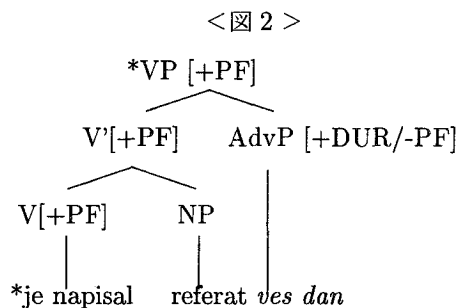
3. 統語論的解釈

今、動詞句 VP の構造を、標準的な X-bar 理論に基づいて動詞 V を主要部とする階層構造でとらえると、V の文法素性が VP に投射されるという考えは直感的に支持できるものであろう。すなわち V が、あるアスペクト素性（例えば〈非完了性 [-PF]〉）

という素性を持つなら、VP にもこの素性が反映されるのであって、下の<図 1>のように V が [-PF] であるにもかかわらず V' あるいは VP が逆に [+PF] という相反する素性を持つ、などという構造は考えにくい：



また、VP に付与される文法素性が VP 内の諸要素にも然るべく共有されるという仮定も、言葉の直感に反しないと考えられる。仮に、何らかのアスペクト素性を表すような副詞句が VP 内に発生する場合を想定すると、その素性は V から投射された VP の素性と一致する必要があるだろう。そうでなければ、たとえば VP が [+PF] である場合、VP 内に完了体の特性と相容れない持続の意味 ([+DUR/-PF]) を表す素性を持つ副詞句が発生する事を許容し、*je napisal (pf) referat ves dan 「*彼は一日中レポートを書き上げた【完】」のような文が排除されない：



この原則に照合させると、前節で述べたように、本来 [+PF] の特徴とは相反するはずの [+ITR] の意味素性を持つ頻度副詞が上の<図 2>のように VP 内に発生する構造では、V, VP が [+PF] の素性を持つ場合、VP 内に異なるアスペクト素性をもつ要素が混在するという矛盾が生じてしまう。この矛盾を避けるために、今、ある種の副詞句³は VP 内ではなく、VP の外、統語構造的には上位階層に発生すると仮定しよう。さて、統語理論の研究においては時制辞 Tns や一致 AGR といった機能範疇が仮定さ

³副詞によっては VP 内部つまり V とより緊密な関係の‘深い’位置に発生するものもあると考えられる。例えば様態を表す副詞はここに発生すると予測される。またアスペクト素性を持つ副詞でも、図 2 の例のような持続性の副詞はこの位置に現れると仮定することができるかもしれない。この問題に関してはさらに理論の精密化が必要である。

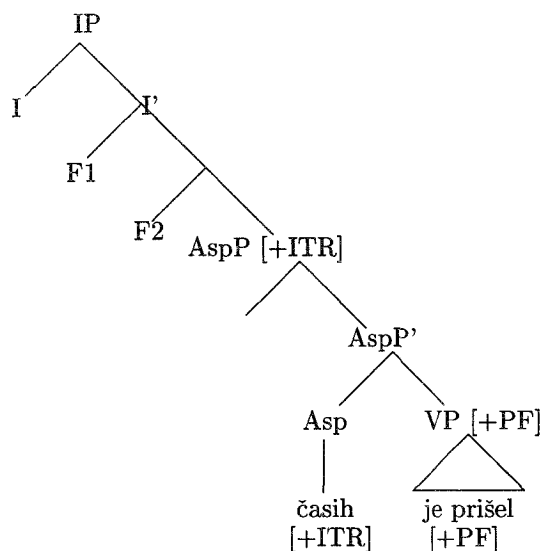
れているが、もしこれらの範疇を統語論的主要部として設定するならアスペクト辞 Asp もまた、同種の範疇として階層構造の中に組み込まれると仮定するのは理に適ったものだろう。アスペクト辞の階層位置をどこにおくかについては別途に議論を要する問題であろうが、小論はこの点に関しては言及せずさしあたり、いくつかの研究で示されている構造に倣って [McCoy 1997 : 242; Felser 1999 : 119ff. など]、これを VP のすぐ上位に置くことにする。スラヴ語では動詞語彙それ自体が文法範疇としてのアスペクト表示を担うので、無標の場合、つまり時制形が基本的意味で用いられ、いかなる文脈の修正も受けない場合、V から投射された VP のアスペクト素性（具体的には完了性 [+PF], 非完了性 [-PF], 場合によっては [+DUR], [+ITR] など）がそのまま AspP に反映される：

$$\text{IP}[+PF] \left[\dots F_1. \dots F_2. \dots \text{AspP}[+PF] \left[\text{AspP}' \left[\text{VP} [+PF] \left[\text{V}' \text{V}^0 [+PF] \right] \right] \right] \right]$$

(F₁, F₂. ... はその他の機能範疇)

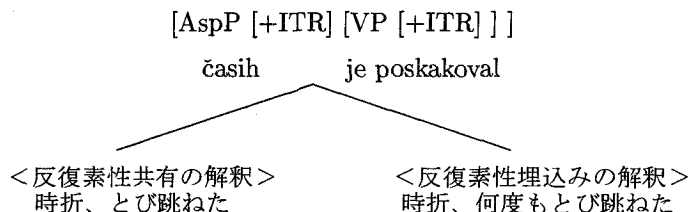
しかしアスペクトに関する修正的要素、例えば頻度副詞が選択され文脈に挿入される場合、これらの要素のアスペクト素性が優先的に AspP に付与され<図 3>のような構造となると想定しよう：

<図 3>



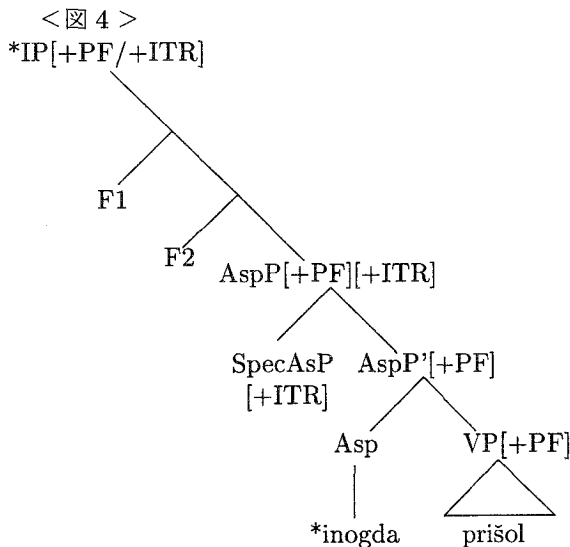
この、VP の外にアスペクト辞 Asp を置く構造を仮定すれば、ひとまず VP 内で完了体と頻度副詞が共起するという矛盾はさけられる。しかしなお、IP 内での AspP の

アスペクト素性と VP のアスペクト素性との一致が義務的であるとすれば、相変わらずこのような構造、すなわち完了体動詞と頻度副詞の共起は許容されないことになってしまう。したがってスロヴェニア語の場合には、VP はそれだけで独自のアスペクト素性を持つことができ、その素性は VP より上位に投射されない、言い換えれば AspP との照合をうけないことが許される、と仮定する必要がある。話し手の立場から言えばこれは、時制文全体のアスペクト素性と VP のアスペクト素性を話し手はそれぞれ別々に選択できるということになる。文脈的修正がない時制文では、IP 全体のアスペクト素性と VP のアスペクト素性は当然一致するが、何らかの文脈的修正が発生する場合、統語論的階層構造の基底にある VP は、修正された IP のアスペクト素性とは別個に独自のアスペクト素性を持つことができる。従って、繰り返される個々の事象について、これを一つの完結事象として提示したければ完了体を使用することができる。一方、不完了体は、①個々の事象が非終結的な活動事象（*jokati* 「泣く」のような）である場合、あるいは②反復であることを VP レベルから明示したい場合、のどちらかである時、選択される。これらの選択肢を採用した場合には、頻度副詞と反復を表す不完了体が共起することになる。頻度副詞のアスペクト素性 [+ITR] と不完了体の素性 [-PF] あるいは [+ITR] は共通素性だから、もちろん、共起することに問題はない。ただし、VP レベルで与えられた反復の意味がさらに AspP で与えられる反復の中に埋め込まれる解釈が可能になる場合もありうるだろう。この場合、二通りの読みが可能になる：



さて、2 節では *časih* / *včasih* という比較的頻度の低い、散発的反復を表す副詞の場合には完了体がしばしば使用され、*pogosto* という頻度の高い反復を表す副詞の場合には不完了体が共起しやすいという傾向性を確認した。このことを、上で仮定した VP レベルでのアスペクトの選択可能性に照合して考えると、次のような推測を導くことができるだろう：比較的散発的に生じる事象は、一回の生起の独立性が高いと認知され、そのために話し手は完了体を選択することが多い。一方、頻繁に生じる事象は、個別事象というよりは連続事象、すなわち反復として認知されるために、本来の反復の表示形式である不完了体の選択に結び付きやすい。

スロヴェニア語の構造を以上のように解釈した上で、他のスラヴ語の場合 — ここではロシア語の場合を例にとって比較検討してみる。スロヴェニア語とは異なり、ロシア語ではふつう、完了体過去形と頻度副詞の共起が起こらない。従ってロシア語の場合には、先の<図 2>のように VP 内に頻度副詞が発生するとしてもこの場合に限っては問題を処理することはできるだろう。しかし言語ごとに異なる統語構造を設定するよりはむしろ、頻度副詞の生じる位置はスロヴェニア語の場合と同じく VP の上のアスペクト辞の中と設定しておき、違いは、ロシア語の場合には V から投射されるアスペクト素性が義務的にアスペクト辞にまで投射されるところにあると仮定したほうが、より統一的な解釈になるだろう。VP のアスペクト素性の Asp への拡張投射を想定すると、アスペクト辞に [+ITR] の意味素性を持つ副詞句が発生した場合、VP から投射されたアスペクト素性が [+PF] であると両者の間に衝突が生じる。このような矛盾した構造は排除されることが予想され、事実ロシア語では完了体動詞と頻度副詞 (*inogda*, *izredka*, *často* など) が共起する<図 4>のようなパターンは排除される：



ただし、ロシア語でも有限回数反復を表す副詞（「二、三度」「数回」など）は完了体と共起できるという事実がある。上記の構造を単純に適用させると、頻度副詞の場合と同じように回数副詞も [+ITR] の素性を持つものだから、完了体の共起は排除されなければならないことになってしまう。この問題については 4 節で言及する。

ここに示したスロヴェニア語とロシア語の、V のアスペクト素性の透過度の違いは、ひとしく完了・不完了の体の体系をもつスラヴ諸語の間でもアスペクト素性の現れかた

に違いがあるだろうという、より一般的な予測に伸展させることができる。Petrushina はチェコ語とロシア語を対比させた [Petruhina 1998] で次の例 (16) を示している :

(16) Eman se protáhl (pf) a řvavě zíval (ipf).

REFL stretched and loudly yawned

エマンは 伸びをし 【完】 大声をだして あくびをした 【不完】。

二番目の事象に不完了体が用いられているが、これは‘体をのばす’という単一事象に続く‘あくび’が、状態的なものとして描かれていることを表しているという。映像的にいえば、伸びをした後、大あくびをしている様子がずっと映し出されるようなイメージであろう。チェコ語ではこの例のように異なる体の連続はふつうだが、ロシア語ではこの場面のように継起する単一事象を述べる場合、どちらも完了体にした (16B) が自然であるという :

(16B) Eman potjanulsja (pf) i gromko zevnul (pf).

Petrushina はこの違いを、チェコ語（および他の西スラヴ語）では話者が〈完結事象＝完了体〉と〈継続／反復事象＝不完了体〉という基本的な体の対立に依拠しながらも、その都度、表現したいと思う状況に合わせて適切な体を選択することができるのに対し、ロシア語では体の選択は発話者の個々の状況に応じた選択にまかされるというよりは、文法的な制約に依存することが多いためとしている [Petruhina : 361]。この指摘は、ロシア語では V^0 レベルのアスペクト素性が IP レベルにまで投射されることが義務的であるとした先の仮定を直感的に述べたものといえるのではないだろうか。スロヴェニア語の場合の、アスペクト素性が VP 内と IP レベルで別々に指定されるという仮定も、‘表現したいと思う状況に合わせて適切な体を選択することができる’という直感に対応するものと見ることができる。

4. 回数副詞の場合

ふたたび『マリアの家』の考察に戻ると、完了体過去形が反復状況と結びつく別のケースを次の例で見ることができる :

(17) Zasmejalo se je bilo tako naglas, s tistim malim
began to laugh N.SG REFL was such aloud with this little
zvoněkom in zaklicalo(pf) je *dvakrát* : “Minka! Minka!”.
hadn-bell INSTR and called AUX twice Minka

あの小さなベルみたいな音ではっきり笑って、二度
呼んだわ【完】、「ミンカ、ミンカ！」って。

この *dvakrat* 「二回」のような回数副詞も反復状況を明示する手段である。スロヴェニア語の回数副詞は、任意の数詞に *-krat* 「回」を付加した複合形で形成される。『マリアの家』には上記の例の他に‘数詞+krat’の回数副詞の用例がないので、Cankar の他の作品からさらに二例、示しておく：

- (18) *Trikrat* se je *ozrl*(pf) Jernej po družini,
three times REFL AUX turned Jernej over family LOC
od obraza do obraza. (Hlapec Jernej)
from face GEN to face GEN
イェルネイは 三度 家族を 振り返った 【完】、
一人一人の顔を見ながら。

- (19) ...*devetkrat* se je *ulila*(pf) ploha, preden je razčistila (pf) ves smrad,
nine times REFL AUX it showerd before cleared up stench ACC
ki so ga bili prinesli s seboj. (Potepuh)
which AUX it were brought M.PL with self INSTR
九度 大雨が 降って 【完】 ようやく、彼らがもたらした悪臭を
すっかり洗い流した。

‘数詞+krat’あるいは *parkrat* 「数回」のような回数副詞は、2 節で考察した頻度副詞とは異なり、反復が有限回数であることを明示するので、反復状況は全体として終結性の特徴を持つことになる。一方、回数副詞を形成する数詞の値が大きくなり *sto* (100) や *tisoč* (1000) から *stokrat*, *tisočkrat* が形成されると、文字どおりの反復回数というよりは *mnogokrat*, *večkrat* 「何度も、繰り返して」などと同じく、実質的な頻度副詞となる：

- (20) *Mnogokrat* so *prišle* (pf) v samo sobo strahote. (Hiša Marije)
frequently AUX came F.PL into very room ACC fear NOM.PL
恐ろしいものたちは しばしば、部屋の中にまで 入って来た 【完】。
- (21) *dejal*(pf) nam je senjor Montez, naš slavní zapovednik,
talked us DAT AUX our famous commandar NOM
sto in stokrat... (Tavčar, Janez Sonce)
hundred and hundred times

我らが名高き司令官、セニョール＝モンテズは、
幾度となく繰り返し我らに語った【完】...

同様に、*velikokrat*, *pogostokrat* など、-krat と結合する要素が不特定の多回性を表すものは「たびたび、しばしば」の意味となり、*pogosto* と同義の非終結的反復の副詞となる。不定代名詞を用いた *nekaterikrat* / *nekajkrat* / *nekolikokrat* 「何度か」は、反復の回数が特定されず終結性が明確でないという点で頻度副詞的であるが、反復回数に一定の制限を与えるという点で回数副詞的でもある。

では回数副詞と動詞の体の共起関係はどのようなものだろうか。上掲の (17) から (21) までの例ではいずれも完了体過去形が共起している。次の (22A) に Tavčar の『Janez Sonce ヤネズ・ソンツェ (1885)』, (22B) に I. Sivec の『Kruh ponoči spi パンは夜中に眠る (1994)』の例をまとめて示す(グロス省略):

(22A) Tavčar *Janez Sonce*

Zaklical(pf) je dvakrat in trikrat

彼は二度、三度と 叫んだ【完】

... izstrelili(pf) so *trikrat* zaporedoma svoje muškete

(彼らは) マスケット銃を立て続けに三たび 発砲した【完】

... ponavljal(ipf) je Tinač *obilokrat*

ティナッチは何度も 繰り返した【不完】

... ter *nekolikokrat* grdo zatulil(pf) v zrak

そして(彼は) 何度かひどいなり声を宙に向けて 発した【完】

Montez nam je pravil(pf) *sto in stokrat*

モンテーズは幾度となく繰り返し、我々に 言った【完】

Kolikokrat mi je očital(pf) Janez Vajkard

一体幾度ヤネズ・ヴァイカードは私を非難したことか【完】

... ko sem se vendar že *tolikokrat* bojeval(ipf) v armadah

それでも私が軍隊でそれだけ幾度も 戦った【不完】時

Don Montez nam pa je *večkrat* dejal(pf)

ドン・モンテーズはしかし、我々にしばしば 語った【完】

(22B) Sivec *Kruh ponoči spi*

In sva skočila(pf) še vsak *trikrat*

そして僕ら二人は 3 度 跳んだ【完】

Ja, šla(pf) sem *osemindvajsetkrat* od Most do Komende
 そう、私はモストからコメンダまで 28 回 歩いた のよ【完・不完】
 Verjetno je tako naredil (pf) že *nekajkrat* na vasi
 おそらく（彼は）田舎で何度かそんなふうにした【完】のだろう
 ... nam je *dostikrat* prinesla(pf) ujeta miško pokazat na dvorišče
 （猫は）よく、捕まえたねずみを見せに中庭に 運んで来た【完】
 Z mamó sta se *večkrat* prav po žensko zaklepetali(pf)
 僕ら二人はよくママと、女みたいに 無駄話をした【完】
 ... da mu je *velikokrat* spekla(pf) svež kruh
 彼のために新しいパンをしばしば 焼いた【完】と

回数副詞と共に起る形式は、19 世紀の Tavčar、現代の Sivec どちらも、反復回数にかかわらず完了体が優勢である。では、これら回数副詞を含む時制文の統語構造についてはどのようなことがいえるだろうか。まず 3 節で統語構造を考えた非終結性の頻度副詞の場合と同じ位置、すなわち VP の上の AspP に生じると仮定してみよう。VP レベルと AspP レベルでそれぞれ 別個にアスペクト素性が付与できるスロヴェニア語の場合には、副詞句の内容が入れ代わるだけで、構造の解釈は非終結反復の場合と基本的に同じで良いように見える。（ただし、高い頻度の反復を表す *večkrat*, *velikokrat* などが不完了体より完了体と共に起するという事実は先の *pogosto* の場合の不完了体の優位性と相容れない。これについてはさらに検討を要するものとしなければならない）。だが、この構造をロシア語に適応させると問題が生じる。3 節の仮定では、ロシア語は V^0 , VP のアスペクト素性が義務的に AspP に投射される言語であるため、V が [+PF] の場合アスペクト辞にこれと矛盾する素性を持つ要素があらわれることができない、そのために反復の副詞句と完了体の共起が排除されると解釈した。しかし、回数副詞の場合には、ロシア語でも完了体と共に起ることができる：

- (23) Oni prošli(pf) *mnogo raz* do apteki i nazad.
 they went through many times as far as pharmacy GEN and back
 (Erenburg, Ottepel' [Barentsen : 4])
 彼らは 何度も 薬局まで 行って【完】戻って来た。

もちろん、不完了体の共起も可能である：

- (24) Po doroge sjuda ja *neskol'ko raz* oboračivalsja(ipf),
 along way DAT to here I several times looked back

no ja nikogo ne, uvidel (pf). (Barentsen : 22)

but nobody GEN NEG saw

ここへの途上僕は何度か振り返った【不完】けど、誰も見なかった。

有限回数反復の状況での完了体の使用は、ロシア語のアスペクト論で‘総括的意味’と呼ばれ、スラヴ諸語において広く観察されると指摘される [Galton 1976 : 130-133]⁴。

‘総括的意味’の解釈では、ある限られた時間枠内で有限回行われる反復は全体として一つの終結性事象とみなすことができるので、特定一回の事象と同様に扱われるとされる。Maslov によれば‘総括的意味’で使用される完了体は、不完了体と同じ文脈(すなわち反復の状況)に現れることができるという点で体の‘類義的競合関係’に立ち、ここにおいて体の対立は弱められる [Maslov 1972 (1984 : 83) ; これに関してはさらに Forsyth 1970 : 162; Rassudova 1984 : 54 など]。ロシア語の事実在即して回数副詞と完了体の共起関係を整合的に説明するためには、いくつかの構造が想定可能であろうと考えられる。たとえば、回数副詞のアスペクト素性が [+ITR] という素性ととともに、反復の有限性ということから生じる終結性 ([+TELIC]) の素性を持つと仮定してみよう。すると、IP 全体が [+PF] のアスペクトを選択しても、[+PF] と照合して矛盾しない [+TELIC] の素性を持つ回数副詞はアスペクト辞の位置に生じることができ、また IP のアスペクト素性が [+ITR] の場合には、回数副詞本来の反復の意味素性 [+ITR] があるので不完了体との共起にも抵触しない。このように、回数副詞のアスペクト素性を二重に設定することによって、3 節で設定した構造のままロシア語で完了体、不完了体双方の体が反復を表す副詞と共起する状況が説明される。しかし回数副詞のアスペクト素性に二重性を与えるという仮定では、言語個別的な(例えばロシア語の場合には必要とするなど)特性とするのか、あるいは普遍的特性とみなすべきか、という点が次の問題となろう。副詞の統語論位置について、全く別の考え方に立って、回数副詞は頻度副詞とは異なり VP 内部の副詞句の位置に発生すると仮定することも可能かもしれない。この時、回数副詞は反復の明示的要素というよりはむしろ様態副詞的な役割を果たすとみなすことができる。この場合には体の共起関係もまた、別の解釈が必要になる。いずれにしても、回数副詞のアスペクト素性の問題は、回数副詞がどの位置に発生するかというより基本的な問題とともに、さらに考察を重ねる必要がある。

⁴ロシア語の完了体による反復‘総括的意味’は Mazon(1914) にすでに指摘されている。また Galton は‘総括的意味’を、ここで示される反復のケースのみならず、posidel「一定時間すわり通す」のような終結性を持った活動事象が完了体で表される場合にもあてはめている。

5. まとめ

小論では Cankar の『救済のマリアの家』の反復副詞と動詞の体の共起関係を中心に、反復副詞を含む文の統語構造について考察した。スロヴェニア語とロシア語の違いが示唆するように、個々のスラヴ語によって VP のアスペクト素性の透過度に違いがあることが予想される。この観点からは、他のスラヴ語の場合にどのようなことがいえるかということが発展課題として与えられるだろう。また、アスペクト辞の階層性の問題も検討すべきことがらである。Cinque (1999) は叙想辞 *Mod*, 時制辞、アスペクト辞などがそれぞれ、さらに下位範疇的な意味によって一定の階層性で構造化されているとし、副詞句の階層性を示している。反復のアスペクト辞では *habitual* (*usually, customarily, generally*), *frequentative* (*often, sometimes*), *durative*, *repetitive* (*again*), *iterative* (*several times*) などがそれぞれ、独立した機能範疇として階層化されているという。この問題は意味論的に、副詞の作用域の広さの問題と言い換えることもでき、スラヴ語のアスペクト辞にも関係すると考えられる。たとえば *ob nedeljah* 「日曜日毎に」と *včasih* という二つの反復副詞を含む文：

ob nedeljah je včasih iz same oholosti plačeval kmetom za vino

日曜にはいつも、時にはただ尊大さゆえに、農民達にワインの代金を払った

という反復は、下の (A) の関係でとらえることが普通であろう：

(A) *ob nedeljah* [*včasih*... [VP]]]

【日曜日ごとに【時には尊大さから【支払った】】】

(B) * [*včasih*... [*ob nedeljah* [VP]]

* 【時には尊大さから【日曜日ごとに【支払った】】】

つまり習慣性反復 (*ob nedeljah*) と散発的反復 (*včasih*) では、前者の中に後者が埋込まれることはあっても後者の中に前者が埋込まれるような事態は想像しにくい。前者を [+HAB]、後者を [+ITR] とすればここに [+HAB] > [+ITR] のような階層関係があると予測することは言葉の直感にも反しない。この問題は、先に言及した、回数副詞の発生する統語位置の問題とも関連させて順次検討することによって明らかにしなければならないだろう。

<文献>

- Барентсен, А. 1992. "Об обстоцтельствах ограниченной кратности действия в русском языке. часть 1." Barentsen, Groen, Sprenger (eds.) *Studies in Russian Linguistics. Studies in Slavic and General Linguistics.* vol.19. RODOPI. Amsterdam. 1-66.
- Бондарко, А.В. 1990. "О значениях видов русского глагола. Исходные принципы." ВЯ. № 4. 5-24.
- . 1991. "Предельность и глагольный вид." *Изв. АН. СЛЯ*, 50. № 3. 195-206.
- Бондарко, А.В. (ред.) 1987. *Теория функциональной грамматики. Введение. Аспектуальность. Временная локализованность. Таксис.* Л.: Наука.
- Маслов, Ю. 1972. "Система частных видовых значений и типы противопоставлений соверщенного и несовершенного вида. " в Маслов, 1984. *Очерки по аспектологии.* Ленинград: ЛГУ. 70-84.
- Cinque, G. 1999. *Adverbs and Functional Heads. A Cross-Linguistic Perspective.* Oxford Studies in Comparative syntax.
- ESJ: Toporišič, J. 1992. *Enciklopedija slovenskega jezika.* Ljubljana: Cankarjeva Založba.
- Forsyth, J. 1970. *Grammar of Aspect. Usage and Meaning in the Russian Verb.* Cambridge.
- Galton, H. 1976. *The main functions of the Slavic verbal aspect.* Skopje.
- McCoy, S. 1997. "Predicates and Pronoun Doubling in Colloquial Russian." *FASL* 1997. 231-251.
- МČ: Petr, J. (ed.) 1986. *Mluvnice Češtiny.* 2. Československá Akademie věd. Praha.
- Orešnik, J. 1994. *Slovenski glagolski vid in Univerzalna slovnica.* SANU. Ljubljana.
- Petruhina, E.V. 1998. "Сопоставительная типология глагольного вида в современных славянских чзыках." *Типология вида. Проблемы, поиски, решения.* М.: Языки русской культуры. 356-363.
- Rassudova, O.P. 1984. *Aspectual Usage in modern Russian.* (translated by G.Eramian)

M.: Russkij jazyk.

SS: Toporišič, J. 1984. *Slovenska slovnica*. Založba obzorja, Maribor.

SSKJ: 1994. *Slovar Slovenskega Knjižnega Jezika*. Ljubljana, DZŠ.

Škrabec, St. 1903. "Zum Gebrauch der Verba perfectiva und imperfectiva im Slovenischen." *Archiv f. slav. Phil.* XXV. 554-564.

Vendler, Z. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

Vincenot, C. 1975. *Essai de Grammaire slovène*. Mladinska knjiga, Ljubljana.

三谷恵子、1998. 『『救護者マリアの家』の反復表現 — スロヴェニア語の動詞の体の用法に関する一考察 —』筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書。平成10年度。653-666.

Abstract

Aspect and Iterative Adverbs

— Reexamination of Slovene Verbal Aspect —

Keiko MITANI

The opposition of the Perfective and Imperfective Aspects is one of the main features of Slovene and other Slavic languages : Aspect (*glagolski vid* in Slovene) as a grammatical category is assigned to each verb, just as grammatical gender is assigned to each noun. The basic meaning of Aspects in Slovene is the same as in other Slavic languages : the Perfective describes the situation as something completed or terminated, and the Imperfective describes the situation without expressing such completedness. It is therefore natural to expect the Imperfective verb to be used in an iterative expression, for a situation where one and the same event is repeated is usually conceptualized as continuing, non-completed. Indeed the Imperfective is required in order to express the Iterative as long as the situation is unmarked, i.e. the verbal predicate has neutral tense meaning and no modifier is added to change the aspect meaning. This constraint might seem to hold true also for the situation in which an iterative adverb is included. The fact is, however, that Perfective verbs can co-occur with iterative adverbs to express the iterative situation.

In (Mitani, 1998) the author examined the usage of Aspect in *Hiša Marije Pomočnice* (*The House of Mary the Helper*) , a novel written by Slovene writer Ivan Cankar, paying special attention to the iterative situation. This novel is characteristic in that the iterative adverb *časih* "sometimes, now and then" is used with relatively high frequency , 39 times in total, and 35 of them are used with the past tense form of Perfective verbs.

Based on this observation the present paper reexamines the feature of Slovene Aspect and interprets how and why Slovene Perfective verbs co-occur with iterative adverbs in terms of syntactic structure.

According to the standard X-bar theory, which assumes that a V' feature is projected to its maximal projection VP and the projected feature should be properly shared by other components within VP, AdvP with the aspect feature of [+ITR] could not occur under VP when V is featured [+PF], for [+PF] is incompatible with [+ITR] in essence. In Slovene, however, the Perfective verb co-occurs with an iterative adverb, the aspect feature of which is [+ITR]. In order to explain this, the author proposes that certain aspect adverbs should occupy the position outside VP, namely, in the functional category of AspP which is immediately above the VP. The feature conflict can be avoided if we maintain that in Slovene the grammatical feature of VP is allowed to remain unprojected to the upper functional categories, so that the AspP and VP each may carry the aspect feature separately.

Russian is different in that the co-occurrence of the Perfective and iterative adverbs like *izredka*, *inogda*, the counterparts of Slovene *časih*, is eliminated in unmarked situations. This can be interpreted in terms of the difference of projection constraint : Russian is a language in which VP' feature is automatically projected to the upper functional categories, presumably up to IP, so that the feature of AspP must be consonant with the VP feature.